

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！

ネットワーク

Network

No.359 2019年4月号

特集

企業・社員という『市民』とともに

～企業ボランティアの今までとこれから～

思い立ったがボラ日

NPO法人パフォーマンスバンクで
盛り上げボランティア

いいもの みい〜つけた! vol.18

NPO法人SOU
米袋トートバッグ、おばけ箸置き!!

セルフヘルプという力 第18回

聴覚に障害のある親をもつ
聞こえる子どもの会 J-CODA

あすマネ

セルフヘルプグループってなに?
～「ひとりじゃない」を実感できる場の力～





思い立ったが

ジツ
ボラ白



このコーナーでは、毎回一つの団体取材し、活動内容やそこで活動するボランティアさんの生の声をお届けします。

NPO法人 パフォーマンスバンク

**「音楽が好きなこと」
会場に集まった人たちの共通点**

まだ寒さの厳しい2月半ば、「アンパンマンマーチ」やとなりのトトロのテーマソング、皆知っているあの曲が演奏されると会場は温かな雰囲気になりました。聴き手も演奏者も、それを支えるスタッフとボランティアも音楽の力で一つとなった。

「演奏してほしいと演奏したいをつなぐ」

今回ボランティア受け入れに協力してくれたのは、「NPO法人パフォーマンスバンク」（以下、パフォーマンスバンク）の鈴木さん。「生の演奏を聞いてみたい！」という声とハイアマチュ



普段なかなか間近で聴けない本格的な生演奏をお届けします。
(写真提供:NPO法人パフォーマンスバンク)

アやプロの演奏家の「生の演奏を届けたい！」という想いをつなぐ活動をしており、高齢者の施設やホスピスなどで、演奏家が出張演奏をする「コーディネート」の役割を担っている。パフォーマンスバンクは「音楽に触れたいすべての人に生演奏を届ける」ために活動を続けている。

また、パフォーマンスバンクが手がけるコンサートは一般に想像されるコンサートとは雰囲気異なる。静かに、じつと、黙って聴く必要はない。純粹に音楽を楽しみ、おしゃべりしながら生の演奏に触れられる。

今回は浦和市にある「子育て支援センターうらわ」で行われたコンサートの盛り上げ役としてのボランティアとして参加した。



サクソ演奏がお誕生日会を盛り上げます。
(写真提供:NPO法人パフォーマンスバンク)



奏者と観客が一体となって楽しめる参加型音楽プログラム。(写真提供:NPO法人パフォーマンスバンク)



たくさんのお客さん!
コンサートが始まります!



今日の役目は盛り上げ役!



普段は触れない楽器に大人も子どもも釘づけ。

NPO法人 パフォーマンスバンク

<https://p-bank.org/>
Facebook : <https://www.facebook.com/performance.bank/>

ボランティアは簡単だが重要な役割

今回の演奏者は弦楽四重奏の「ことり音楽隊」

以前は盛り上げ役としてのボランティアの参加について考えてはいなかった鈴木さんだが、「演奏者しかこの活動に参加できないのが残念だな」と思っていました。より多くの人に音楽の楽しさを現場で知ってもらいたいと感じ、一般人たちにも生演奏に触れてもらうため、ボランティアの募集を始めた。たくさんの人に生演奏を届けたいと強く願っている鈴木さんならではの想いだ。

会場には大勢の親子が集まってきた。今回のボランティア活動は「参加型プログラム」だ。歌詞カードを持って聴き手のサポートをしたり、合いの手を入れることでコンサートを盛り上げることが主な役割となる。ボランティアとして活動しながら、ハイレベルの演奏を聴くことができる。なんと贅沢なことか!

次ページでは活動内容を 紹介しています

最初は緊張気味だった取材班も、体操で体を動かすことや、コンサートの参加者と一緒に演奏を聴くことで、会場と心をつなげる。「演奏者とお客さんの距離が近いのが私たちのコンサートです。演奏者も、お客さんの反応が気になるんです。だからこそ、良い雰囲気を作るのが大事です」と、鈴木さんは答えてくれた。音楽が好きなら誰でも気軽に参加できるボランティアプログラムだったが、その役割は重要だ。だからこそ活動の後には、何にも代えがたい充実感が私たちを包んでいた。

「参加型プログラム」を体験しました!



① コンサートの前には
入念な打合せ。
会場の盛り上げには
タイミングも重要



② たくさんのお客さんに
緊張気味のスタッフ...



③ ちいさい子ども用の
バイオリンで演奏体験!



④ 後半は緊張も解け、
すっかり楽しんでます。



⑤ 「ことり音楽隊」の皆様も取材にご協力いただきました。
ステキな演奏ありがとうございます。

深める

ボランティア・市民活動に役立つ視点や情報をお届けします。

特集

企業・社員という『市民』とともに ～企業ボランティアの今までとこれから～

- 6 企業・社員という『市民』とともに
～企業ボランティアの今までとこれから～
- 13 企業ボランティアの祭典2019
- 15 D&I協働プログラム報告
多様性が輝く会社や社会であるために
- 16 日の出町の事例
地域社会の中で支え合う、協力し合う！
イオンモール日の出・イオンシネマ日の出×日の出町社会福祉協議会
- 17 **あすマネ** セルフヘルプグループってなに？ ～「ひとりじゃない」を実感できる場のカ～

知る

ボランティア・市民活動のさまざまな形やボランティアに
一歩ふみだすヒントを、ご紹介します。

- 7 **思い立ったがボラ日** NPO法人パフォーマンスバンクで盛り上げボランティア
- 21 **あなたのまちのキラッと☆ぼらせんナビ vol.19** 聖学院大学 ボランティア活動支援センター
- 22 **つばやきブレイク vol.6** ボランティアリーパッション？
- 23 **セルフヘルプという力 第18回** J-CODA (Japan-Children of Deaf Adults)
～聞こえない親をもつ聞こえる子ども（コーダ）の存在を知ってほしい
- 26 **いいもの みい～つけた！ vol.18** NPO法人SOU 米袋トートバッグ、おばけ箸置き!!

『ネットワーク』の公式Facebookページあります！

▶▶▶ <https://www.facebook.com/tvac.network/>

- 取材のこぼれ話や、次号に向けて進行中の記事についてリアルタイムでご報告します！
- 過去に掲載した団体の情報や、本誌に関連する東京ボランティア・市民活動センターのお知らせなどを発信します！
- お気に入りやブックマークに登録してご利用ください！

ぜひご利用
ください！



企業・社員という『市民』とともに ～企業ボランティアの今までとこれから～



TVACでは毎年、企業・社員と非営利団体との協働プロジェクトを開発している。サントリー労組のボランティアが、障がいのある人たちの働くお菓子屋さん(かすたねっと)の販売促進に取り組んだ。

1980年代後、東京ボランティア・市民活動センター（以下、TVAC）に、企業からの相談が寄せられるようになり、社員が参加する社会貢献活動へのサポートが始まった。それから約30年間、企業と非営利団体とをつなぎ、互いの強みを活かした協働を模索してきた。

今号では、こうしたTVACの取り組みをご紹介し、今後、企業の社会貢献や社員のボランティアが各地で広がっていくために、企業や社員、非営利団体、そして、中間支援組織がどのようにネットワークしたらよいかを考える材料にさせていただければ幸甚である。



障害のある人の社会参加を企業との連携で進めていく『東京D&Iプロジェクト』。毎年5件の協働プログラムを企画・実施している。去る3月6日(水) 19:00～20:30に飯田橋セントラルプラザ会議室において開催した報告会には、多くの企業関係者と障害関係団体が参加して、交流した。

企業・社員という『市民』とともに 企業ボランティアの今までとこれから

東京ボランティア・市民活動センター(以下、TVAC)では、企業・社員と非営利団体をつなぎ、その協働の活動を支援しています。

今回は、TVACによる企業ボランティア活動¹のこれまでの取り組みを通して、企業ボランティアのこれからの可能性について考えます。

*1 企業ボランティア活動(Corporate Volunteer Program)は、民間企業の社員たちが行うボランティア活動のこと。社員のプライベートな時間で活動する場合や、ボランティア休暇を使ったり、企業が勤務時間を提供して活動する場合もある。

問1 企業からの相談の始まりは?

TVACに企業の社会貢献担当の方が訪れるようになったのは1980年代の後半でした。日本の高度経済成長期に海外に進出した企業が、「欧米の「企業市民(Corporate Citizenship)」という考え、つまり、企業も地域社会の一員であり、そこ

に積極的に貢献することが当然という文化に触れ、日本国内において、本業以外でも積極的に社会に貢献しようということになり、「何ができるでしょうか?」というご相談が寄せられるようになりました。

当初、多くの企業は環境保護やメセナ活動(芸術・文化の支援)に取り組み、社員のボランティア活動については、社員の「自由意志」によるものなので、企業として強制はせず、情報提供やボランティア休暇制度の設置などの間接的支援を行いました。しかし、勤勉で、ボランティア経験の少ない社員の人たちがボランティア休暇制度を使うことはあまりないままでした。

ところが、2001年になると、外資系企業が次々と本センターを訪れ、「支援が届いていないところに支援をしたい」、「本業を活かした社会貢献活動がしたい」、「社員が参加することを積極的に支援したい」という相談が入ってきました。



2019年度の三菱UFJ銀行の新任研修では、東京・横浜・大阪・名古屋において13か所の社会福祉協議会と連携し、135か所の福祉施設に社員がチームで伺う。ボランティア体験2日目には、社員たちが主体的に利用者さんたちとの交流企画を考え、実施している。

これ以外にもTVAACは企業のCSR (Corporate Social Responsibility / 企業の社会的責任) の担当者とともに、「学校教育への支援」や「農山村の高齢化・過疎化」、「NPOの組織強化」、「災害」、「多様性」など、その時々々の社会課題に対して、社員ボランティアや企業の多様なリソースを非営利団体とつなぎ、さまざまなプロジェクトを立ち上げてきました。こうした協働の取り組みを通じて、企業や社員の方々の持つ力の大きさを実感しています(詳細については、TVAACのウェブサイト『企業・社員の方へ』の中に掲載している「TVAACと企業との主な協働プロジェクト」をご参照ください。 [3. <https://www.tvac.or.jp/kgyo/tvac/project/>](https://www.tvac.or.jp/kgyo/tvac/project/))。

問3 社員が参加しやすい活動とは？

戦後、日本のボランティアの中心は、学生や主婦でした。近年では退職したシニア層がボランティアとして活躍しています。こうした人たちは平日の昼に福祉施設や地域社会で活動できます。しかし、政府の行った「労働力調査」によると2018年の就業率は15〜64歳が76.8%、

65歳以上でも24.3%となっています。つまり、65歳以下のほとんどの人が働いていて、65歳以上になっても4分の1の人が働きつづけています。このため、働きながらボランティアでできる機会を増やしていくことが必要になっていくのです。

● 平日の夜や週末の活動

社員の人たちが参加しやすいのは、平日のランチタイムやアフターファイブで会社の中でできる活動です。たとえば、子どもたちのためのおもちゃを作ってプレゼントしたり、障害のある人たちの働くお店のお菓子やパンを会社の中で販売してくれる企業も増えてきました。また、社員研修として実施する場合は、平日の昼間でも活動できるので、福祉施設や教育施設などは受け入れやすいのですが、環境保護やスポーツ支援などの活動は週末が多くなっています。週末であれば、家族や友だちと参加したいという希望もあります。

最近では、SNSなどを使って、非営利団体に対してアドバイスを相談に応じたりする活動もさかんに行われるようになってきました。

● 大人数やチームで参加できる活動

企業からは、「大人数の社員が単



TVACでは障害関係団体と企業との協働プログラムを毎年5件実施している。まず、障害関係団体が考えてきた企業との協働案について、企業関係者がいろいろ質問したり、アドバイスをする。この中から2件が選ばれ、プロボノチームと一緒に実行した。

近では、「プロボノ」と呼ばれる、ビジネスのスキルや経験を活かした活動も人気があります。

問4 なぜ、社員の参加が重要なのか？

● ボランティアの後継者不足

高度経済成長長期は、父親は会社で働き、母親は主婦をしながら地域でボランティアをするといった傾向がありました。最近では共働きも増えています。こうした中、ボランティアに占める割合に高齢の方が多いのが現状です。そのこと自体は素晴らしいことですが、後継者が見つからないという課題も起きています。

● 地域社会とのつながり

また、働いている人たちは、会社と家庭と趣味に時間を使い、地域社会との関わりは薄くなってきているようです。自分たちが暮らす地域社会を誰が支えていくのか？あるいは、自分たちが介護や育児、災害時などに支援が必要となった時に誰が支えてくれるのか？地域社会のつながりを再生することが必要です。

TVACでは三菱UFJ銀行の新任研修に協力して12年が経ちました。社員の人たちがチームになっ

発でボランティアできないか？」という相談が多く寄せられます。しかし、福祉施設や非営利団体が1回に受け入れられる人数は3〜5名と限られている場合が多いのが現状です。そのため、環境保護の活動やイベントのお手伝いなどを紹介することが多いです。可能であれば、少人数のチームに分散したり、リレー形式で活動すると、受入側にも喜んでいただけるようです。

● 関心分野で趣味やビジネススキルを活かした活動

企業の方には、「環境」、「子ども」、「災害」、「スポーツ」などの分野での活動が人気です。特に、子ども分野では、児童養護施設や子ども食堂などに支援が集中していますが、それ以外の児童福祉施設や、病气や障害のある子どもたち、外国にルーツのある子どもたち、ひとり親の子どもたちなど、いろいろな子どもへの支援も必要となっています。また、他の分野にも支援・協力を求めている団体がたくさんありますので、ぜひ、各地にあるボランティア(市民活動)センターにご相談ください。

また、活動内容としては、「初めての人もできる」、「趣味や特技が活かせる」活動の希望が多いです。最



羽村市にある有限会社ドリーミングの理容師の方々は、年に4～5回程度、仕事の後に近くの児童養護施設 東京恵明学園を訪れ、約50名の子どもたちの髪を切っている。活動は28年も続いており、子どもたちは髪を切ってもらいながら、理容師の方々とのお話も楽しんでいる。(第2回「企業ボランティア・アワード」受賞)

て福祉施設等でボランティア体験をしています。こうした研修の目的は、「地域社会のニーズを知る」、「地域の一員として何ができるかを考え、行動する」、「多様な人たちとのコミュニケーションを学ぶ」、「チームワークを学ぶ」といったものです。つまり、企業で働く人たちが、自分たちが暮らし、ビジネスをしている地域社会について理解すること、ビジネスにおいて、そして、プライベートでも、どうやって地域社会に貢献できるのかを学んでいます。

● ボランティア活動の魅力

また、すでに、ボランティアに積極的に参加している人たちは、仕事の中では得ることができないような「多様な人たちとの出会い」や「自分の力を活かせる喜び」、「地域社会についての気づきや学び」、「人間的成長」などを、ボランティア活動の魅力として語ります。

問5 企業や社員ができることは?!

ボランティアに参加したいと思っても、自分たちの企業ではそうした機会がないかもしれません。小さな企業であれば、社員をボランティア

として出す余裕がないところも多いようです。しかし、社員個人や小さな企業でも、「できる時」に「できる事」を「できるだけ」やろう、という取り組みが着実に広がっています。

UBSグループ²⁾とTVACの『多様な子どもたちの架け橋プロジェクト(2008年～現在)』³⁾では、参加する社員や関係者一人ひとりが、自分たちにできることを考え、社会的・経済的に厳しい環境で育つ若者たちへの多彩な支援を次々と展開しています。例えば、成人式を祝う機会のない、外国や児童養護施設出身の若者のために「成人を祝う会」を開催。当日は、社員の人脈を活かして様々なスキルを持つボランティアが集まり、着付けやメイク、ネクタイの結び方講座、写真撮影等を行いました。こうした手作りのお祝い会と記念写真が社会に出ていく若者たちの背中を押してくれています。

また、荒川区のライオンズクラブでは、会員の交流イベントとして、毎年ボーリング大会を開催していますが、そこに障害のある人たちを招待し、チームに分かれて交流しながら競争して楽しんでいます。

そして、現在、全国に3000か所以上に広がっている「子ども食堂」には、企業や地域の人たちが食べ物



毎年TVACが開催している『NPO&施設のためのビジネス基礎講座～支援者を拡大しよう!～』では、企業ボランティア講師から「社会貢献とボランティア」、「ITの活用」、「プレゼン」、「営業」、「戦略づくり」等を学んでいる。写真は株式会社リクルートマネジメントソリューションズで開催した講座「相手に“伝わる”魅力的なプレゼンを学ぼう!」。

を寄付したり、スペースを提供したり、ボランティアとして食事を作ったりしています。

こうした温かい支援が地域社会のつながりを再生していくように思います。

問6

これからの企業の社会貢献は？

最近、相談にいらっしゃる企業の皆さんがお話しされるのは、「SDGs」「ESG」「CSV」「CSV」といった横文字が多いです。地球規模で起きている災害や環境破壊、紛争、貧困等に対する危機感が世界全体に広がっているからでしょう。

SDGs (Sustainable Developing Goals) / 「持続可能な開発目標」とは、2015年9月の国連サミットで採択された『持続可能な開発のための2030アジェンダ』にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴールと169のターゲットから構成されています。こうした目標達成のためには、行政だけではなく、企業も市民も積極的に取り組んでいくことが求められているのです。

また、ESG (Environment,

Society and Governance) とは、「環境・社会・企業統治」を意味し、これらに配慮した企業に投資していくという世界的な動きがあります。

そして、CSV (Creating Shared Value) は、企業が、社会ニーズや問題に取り組むことで社会的価値を創造し、その結果、経済的な価値も創造されるという経営戦略です。

こうした背景の中で、今後、企業とその本業の中でも社会課題に取り組むことになりそうです。その原動力となる社員の人々には、ぜひ、ボランティアとして、あるいは、研修として地域社会に参加し、その経験をもとに、本業あるいは社会貢献活動に取り組んでいただけたらと思います。

問7 TVACや

中間支援組織がすべきことは？

4年前から、東京都生活文化局から企業ボランティアの推進のための補助金をいただくことができました。企業ボランティアについての調査や専用サイトの作成、『企業ボランティア・アワード』という表彰制度、企業ボランティアを講師に迎える『NPO&施設のためのビジネス基礎講座～支援者を拡大しよう!』



三菱商事株式会社は、1974年から、ひとり親家庭の母子を対象としたキャンプ「母と子の自然教室」を実施している。参加する子どもたちには自然の中で遊びと遊んでもらうこと、母親には仕事や家事を忘れ、キャンプを楽しみながら親同士のネットワーク作りをってもらうことを目的としたこのプログラムは、東京YMCAの指導のもと、運営事務局と社員ボランティアで作りに上げている。(第4回「企業ボランティア・アワード特別賞」受賞)

」の実施、「企業&社員のための社会貢献セミナー」の開催、そして、企業と非営利団体との協働プロジェクトの開発に取り組んでいます(詳細については、「ボランティアを考えている企業・社員の方へ」<https://www.tvac.or.jp/kiogyo/>を参照ください)。

また、昨年からは東京都福祉保健局の補助事業として『東京D&Iプロジェクト』もスタートしました。これは、障害のある人たちの社会参加を企業との連携で進めていくというものです(D=Diversity:多様性とI=Inclusion:包含、すなわち多様な人々が一緒に協力しながら暮らし、いく社会を目指すプロジェクト。<https://www.tvac.or.jp/dip/>)。

こうした、行政からの公的なサポートを活用しながら、より多くの企業や社員の人たちが社会貢献活動やボランティア活動に参加できるように取り組んでいきたいと思えます。そのためにも、本センターだけではなく、区市町村のボランティア(市民活動)センターとの連携がとても重要です。前述の各種事業を進めるにあたっては、地域のセンターにも参画してもらっています。

地域の方々や非営利団体と企業・社員がつながり、両者が喜び、両者

が成長しあえる多彩な活動が、全国各地で広がっていくように、私たち中間支援組織がすべきこと、できることはたくさんありそうです。

*2 UBSグループ(UBS証券株式会社、UBS銀行東京支店、UBSアセット・マネジメント株式会社、UBSジャパン・ジャパニア・バイザース株式会社)

*3 https://www.tvac.or.jp/kiogyo/tvac/project/building_bridges_for_children_bbc_project.html

***お気軽にお問合せください!**

東京ボランティア・市民活動センター
(企業担当)

03-6265-0272 ※企業専用ダイヤル
03-3235-1171 (代表)

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1
セントラルプラザ 10 階【JR・地下鉄「飯田橋駅」からすぐ】

開館日:火～土曜日 9:00～21:00/日曜日9:00～17:00(休館日:月曜・祝日・年末年始)

※来所による相談を希望される場合は、事前の予約をお願いします。



企業ボランティアの祭典2019



企業で働きながら非営利団体でボランティアをしている社員の方々の貢献を称える表彰制度。
第4回の今年は9社が受賞した。

梅の香りが漂う2月22日(金)の夜、縁結びの神様として有名な東大神社のマツヤサロンにおいて、今年で4回目を迎える『企業ボランティアの祭典』が開催された(主催:東京ボランティア・市民活動センター)。

当日は企業のCSR・社会貢献担当や、企業で働きながらボランティアをしている方、そして、都内のボランティア・市民活動センターや福祉施設・非営利団体で働いている職員等、100名近くの人が仕事帰りに参加した。

第1部は「企業ボランティア・ワード」の表彰式。社員が非営利団体でボランティア活動をしている企業を讃える。今年も、選考委員会によって、大賞3社、特別賞2社、奨励賞4社が選ばれた(別表参照)。

休憩時間には、各所で参加者同士の名刺交換が始まる。ここで初めて出会った企業関係者や非営利団体の人たちがお互いの活動について紹介しながら、縁を結んでいく。

第2部では、選考委員長である立教大学社会デザイン研究所所長の中村陽一さんがメイン・パーソナリティを務めるニッポン放送「おしゃべり

ラボ〜しあわせSocial Design〜」番外編として、佐々木瞳アナウンサーとお2人で、大賞の3社にインタビューをした。

続いて、本年度、本センターと企業と非営利団体との協働プロジェクト3件について報告。新宿区内の福祉施設で実施した企業の新任研修や、ベテラン営業マンからNPOが学ぶ講座、和菓子屋によるシニアボランティアの感謝のつどいと、社員がボランティアとして参加する多彩な活動が紹介された。

中村選考委員長は、「これまでのやり方だけでは解決できない社会課題のために、企業が様々なリソースを活かして活動をしていくことが、今、とても強く求められている」と話された。

登壇した企業関係者からは、「ボランティア活動によって、多くの気づきや学びがあり、自分の人生を豊かにするとともに、仕事にも活かせる」というコメントを多く聞いた。また、非営利団体の職員からは、企業の人たちとつながる喜びとともに、そのビジネスの視点やスキル、商品やサービスなど、いろいろな形で貢献してもらっていることへの感謝の言葉が多かった。



祭典の合間に、受賞した企業の方にお話を伺った。「私たちの活動は、仕事が終わったあととすぐ参加できるように、会社の近くの活動から始まりました」と言う。その小さな活動が今では多くの仲間が参加し、継続しながら広がっている。「何か社会のためにできることをしたいという小さな思いが、共感と呼んだのかもしれない」と、嬉しそうに微笑んでいた。

(阿部宏大)

(写真右上) 株式会社パナソニックと一般社団法人東京キワニスクラブ。(左上) グラクソ・スミスクライン株式会社 / グラクソ・スミスクライン・コンシューマー・ヘルスケア・ジャパン株式会社 / ヴィーブヘルスケア株式会社と 公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ ジャパン。(下) 日本GLP株式会社と認定NPO法人ハンズオン東京と社会福祉法人共生会児童養護施設希望の家。

* 企業ボランティア・アワード 受賞団体 *

〈大賞〉

- 日本GLP株式会社 【パートナー団体】 認定NPO法人ハンズオン東京 / 社会福祉法人共生会児童養護施設希望の家
- グラクソ・スミスクライン株式会社 / グラクソ・スミスクライン・コンシューマー・ヘルスケア・ジャパン株式会社 / ヴィーブヘルスケア株式会社 【パートナー団体】 公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン
- 株式会社パナソニック 【パートナー団体】 一般社団法人東京キワニスクラブ

〈特別賞〉

- 三菱商事株式会社 【パートナー団体】 東京および近郊の母子団体他
- 日本生命保険相互会社 【パートナー団体】 公益財団法人ニッセイ緑の財団

〈スタートアップ奨励賞〉

- 三和グループ社会貢献倶楽部・三和タジマ株式会社 【パートナー団体】 NPO法人キッズドア
- セゾン自動車火災保険株式会社・そんぼ24損害保険株式会社 【パートナー団体】 社会福祉法人豊島区民社会福祉協議会

〈プロボノ奨励賞〉

- Omnicom Health Group Asia Pacific / POLARIS 【パートナー団体】 NPO法人日本ソーシャルフットボール協会

〈コミュニティ奨励賞〉

- スターバックスコーヒー・ジャパン株式会社 【パートナー団体】 宝塚大学、新宿区立障害者福祉センター

※詳細については、下記のサイトをご参照ください。

『企業ボランティア・アワード』受賞企業 <https://www.tvac.or.jp/kigyo/case/award/>

D&I協働プログラム報告

多様性が輝く会社や社会であるために

東京ボランティア・市民活動セン

ター(TVAC)は、多様な障害のある方々の社会参加を促進するために、企業と障害関係団体とが連携して取り組む「企業CSR等連携促進事業(東京D&Iプロジェクト)」を2017年度よりスタートしました。D=Diversityは「多様性」、I=Inclusionは「包含」を意味し、多様な人々が一緒に協力しながら暮らしていく社会を目指します。本事業は東京都福祉保健局の補助金を受けて実



NPOと企業関係者のネットワーキング。

施しています。

その中で実施する協働プログラムとは、企業と障害関係団体の連携の取り組みであり、両者にとって意義のあるプログラムを年に5件、企画・実施しています。プログラムの内容は、企業と障害関係団体の双方のニーズとリソースとを組み合わせることで検討しています。



ビジネス・スキルを活かして協力。

去る3月6日(水)、TVACがある飯田橋セントラルプラザ12階会議

室にて本年度実施した協働プログラムの報告会を開催しました。

開会あいさつの後、障害のある人たちが働いているカフェやお菓子屋さんのお菓子と紅茶を試食したり、参加者同士が名刺交換などをしました。

そして、左表の通り協働プログラムの5件の報告が行われました。

登壇いただいた方のほか、各プログラムに参加した企業関係者の方々にもコメントをいただき、工夫した点や活動への想いを語っていただきました。

本報告会は、さまざまな企業や福祉施設、NPOの方々が集い、あらたな出会いや交流の機会となったようです。

①ココロン・スイーツで福祉喫茶テコ入れ大作戦!

障害のある人たちのカフェでの顧客拡大イベントを実施しました。

【障害関係団体】社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会

【企業関係】D&I プロボノチーム(本プロジェクトで結成された企業混合チーム)

②地域に出かける! さらに多くの企業とつながる!

障害のある人たちの音楽やダンスで地域とのつながりを作りました。

【障害関係団体】社会福祉法人 武蔵野会 リアン文京

【企業関係】D&I プロボノチーム(本プロジェクトで結成された企業混合チーム)

③情報発信力アップ!! シンプルに伝わる工夫を!

障害児支援 NPO のウェブサイトを改良しました。

【障害関係団体】NPO 法人 おもちゃの図書館全国連絡会

【企業関係】株式会社 日立ハイテクノロジーズ

④カフェコスモ 売上改善プロジェクト!

障害のある人たちが働くカフェで市場調査と英会話講座を実施しました。

【障害関係団体】社会福祉法人 大田幸陽会 さわかワークセンター

【企業関係】マイクロンジャパン株式会社

⑤冬のぼんぼこ祭開催!

多様な人たちが体験し交流できるお祭を開催しました。

【障害関係団体他】NPO 法人 シェイクハートプロジェクト/ NPO 法人 豊島子ども

WAKUWAKU ネットワーク/社会福祉法人 豊島区民社会福祉協議会/豊島区

【企業関係】協賛・協力 14 社

日の出町の事例

地域社会の中で支え合う、協力し合う！

イオンモール日の出・イオンシネマ日の出×日の出町社会福祉協議会

イオンモール日の出は、東京都西多摩郡日の出町にある3600台の駐車スペースを備え、専門店、レストラン、映画館等も併設されている大型ショッピングセンターです。また、施設内には、多目的ホール『イオンホール』や催事スペースがあり、日の出町の成人式が開催されるなど、町の中心的施設となっています。さらに、「地域とともに暮らしの未来をつくる」というイオンモールの経営理念の下、催事スペースでは子育て、障害、高齢、医療等、様々な分野の団体による文化活動や展示・発表会・コンサート等が行われています。

す。その中で、障害関係事業としては、映画会や自主生産品の合同展示販売会、絵画等の合同作品展等が行われています。

前10時上映の回に213名、午後6時上映の回に160名の来場者があり、午前の回には20名近くの障害のある方も参加していました。また、参加者アンケートも71%が「大変良かった」、26%が「良かった」と肯定的評価が97%となっており、「生命の大切さ、家族の大切さについて考えさせられました」や「参加者の意見交換が非常に良かった」等、多くの感想やご意見もいただいています。

温かい対応が、自然とできるようなっているようです。イオンモール日の出とイオンシネマ日の出は、企業と障害関係団体等を誠心誠意つないでいる日の出町社会福祉協議会と共に、地域社会の中で障害のある人もない人も互いに協力し合いながら暮らしていく社会作りに大いに寄与していると言えるのではないのでしょうか。

(取材・記録／企業担当)

また、平成23(2011)年度より、『ここをささえあうつどい』として実施している映画会は、日の出町ボランティアセンター運営委員会において、障害についての理解を深めるために映画でアプローチすることが提案されたことがきっかけで、日の出町社会福祉協議会が主催し、イオンシネマ日の出のご協力により実現しました。映画鑑賞後には、映画に関係したテーマで、当事者の方にお話をさせていただく時間も設けています。

また、平成26(2014)年度からは、子ども同伴の鑑賞も可能とし、平成28(2016)年度からは、キッズコーナーを劇場外に設置してボランティアに子どもの見守りをしていただき、子育て中の方にもゆっくりと映画を鑑賞していただけるようにしました。この映画会は毎年大盛況で、平成30(2018)年度も、午

地域において利便性が高く、多くの方が利用するショッピングモールのスペースを障害関係の事業に提供していただくことで、日頃は福祉に関心のない人の目にも触れる機会となります。その結果、多くの方が福祉の映画会に参加したり、障害者施設の自主生産品の購入につながり、障害の理解も進んでいるようです。

一方、イオンモール日の出やイオンシネマ日の出にとっても、多様な方に店舗を利用していただくことで、客層が広がっています。また従業員も障害がある人に対しての心遣いや



『ここをささえあうつどい』にて。

イオンモール日の出

<https://hinode-aeonmall.com/>

イオンシネマ日の出

<https://cinema.aeoncinema.com/wm/hinode/>

日の出町社会福祉協議会

<https://hinodeshakyo.jimdo.com/>

あすマネ

明日からすぐにマネ(真似・マネジメント)できる!

このコーナーは、TVACに寄せられた相談をもとに、市民活動やNPOの運営にまつわるヒントを紹介しています。

* 本日のご相談 *

セルフヘルプグループってなに? ～「ひとりじゃない」を実感できる場の力～

東京ボランティア・市民活動センター(以下、TVAC)には、さまざまな「当事者」の方からの相談が寄せられています。TVACでは、年々増加する相談への対応をより充実させるために、当事者活動やセルフヘルプグループ(以下、SHG)に関する情報交換会や交流会など、様々な取り組みをおこなっています。

そこで語られたSHGとの出会い、活動を立ち上げたきっかけ、仲間の存在についてなど、さまざまな「声」をご紹介します。



グループとの出会い

- ・参加する前から会があることは知っていて、何年もチラシを持っていた。
- ・自分だけと思って、苦しかった。社会がちがったら生きやすかったと思う。
- ・ずっと「グループを探す」というところまでいかなかったけど、やっと参加できるところまで来た。
- ・最初に参加するまで長かった。勇気をだした。
- ・自分のことをわかってくれる人がいた。
- ・他の人の話を聞いて、自分がいま、どういう状況にいるのかがわかった。
- ・受け皿があることを知って、ささやかな希望になった。
- ・普段人に言えないことも、ここでは言えるかと思った。
- ・悩みは解決しないけど、心の支えになった。
- ・世の中捨てたもんじゃない、と感じた。

一人ひとりの、 はじまりの物語

● わかってくれる人と
会いたい

「どこにいても居心地が悪かった」、「自分が『なんなのか』わからなかった」、「絶望と怒りしかなかった」、「みんな、どうやって生きていくんだろう」、「自分でも何に悩んでいるのかわからなかった」、「こんなことで苦しいのは自分だけなんじゃないかと思っていた」、「インター

ネットやテレビをみて自分が『当てはまる』ものを探し求める日々だった」。SHGと出会う前、まさに暗中模索の状況だったと多くの方が語ります。

そんな中やっとグループを見つけても、扉を開けるまでに長い時間がかかった方も少なくありません。たくさんの葛藤をこえて、やっこのことで辿りついてみると、そこでは当事者同士、参加者同士がりのまま、自由に語り合っている…その様子が「驚愕した」という方もたくさんい



活動のはじまり方

らっしゃいました。そして、他の参加者の話をきいて「自分が悩んでいるものに、なまえ^レがあったという衝撃」を感じたり、「モヤモヤにタイトルがついた感じがした」という方もいます。勇気を出して自分の心のうちを明かしたとき、「わたしも」と言ってくれる人がいて、「それが驚きと安堵だった」と話す人もいました。それは、ずっと一人で抱えてきたものが、自分だけじゃない、わかってくれる誰かがいると感じられた瞬間でもあります。

TVACとつながりのあるSHGにおいては、立ち上げた方のほとんどが他のグループの活動に参加をしたことがあります。他のグループに参加しながら並行して新たな活動をはじめ方も多く、新しい活動は「今とはちがう活動がほしい」という気持ちから立ち上がっています。また、やつのことで見つけたグループであっても、参加するうちに「なんか違うかな…」と感じることも

あり、「ぴったりこない」、「これじゃなくて、あれがしたい」、「自分の居場所をつくりたい」そんな思いからたくさん人の活動が生まれています。最初は一人の思いでも、活動して仲間が増えることで、グループはたくさんさんの人の支えとなつていきます。

●新しいテーマで

SHGは多くの場合、そのテーマとなる「当事者性」、たとえば、「ひきこもり」や「暴力の被害」、「ひとり親」など共通する状況や体験、あるいは同じ病気や障害ということを軸に参加者(当事者)同士がつながっています。自分自身の求めるテーマの団体があるとも限らず、「とりあえず、近いテーマのところに行ってみる」という場合もあります。さらに「当事者性」は複合的なことが多く、自分にぴったりに思える会を探すのは大変です。実際、多くのグループが「自分が求める会がなかったから」と立ち上がっています。

●新しい活動で

テーマに加えて、「何をやるか」も大事です。SHGの活動内容は多岐にわたっています。ミーティングと呼ばれる分かち合いの会や、回復のための12ステップ^{*}、おしゃべり会、

お楽しみイベントなどの余暇活動、学習会、ワークショップの他、社会に情報を発信する活動、啓発のための活動、政策提言、「当事者研究」なども増えていますし、インターネット上でつながるオンラインミーティングや掲示板での交流もあります。最近では、「女子会」や、「バー」と名付けた夜に開催する集まりも見かれます。SHGに求めるものは人それぞれですが、続けて参加するには活動の内容が合っていることも重要になります。今はない活動をつくるために、既存のグループから新しい団体が立ち上がることもあります。

●見えない「前提」を感じて

テーマや活動内容の「違うかな…」とは別の理由で新しいグループをはじめ方もいます。その一つが「他のグループに参加したけど、暗黙のうちに、一つの価値観が前提にあることを感じて、苦しかった」という場合です。たとえば「DV被害の自助グループに行つたけど、異性間での暴力が暗黙の前提になっていて同性パートナーから暴力を受けた自分は居づらかった」とか、「グループケアのグループに参加したけど、亡くなった理由を話したら周りの空気が変わってしまった、そこにいるのが



苦しくなった」という方もいました。

● 最近の動向

最近では、同じテーマでも世代別の活動が立ち上がることが増えていきます。「若年発症」の方に限る患者会や、中高年世代の発達障害のグループ、30代で家族の介護をしている人たちのグループなどは、既存の当事者会での話題が自分のライフステージと合っていないと感じ、仕事や結婚、将来のことなど、自分たちの世代ならではの話題で情報交換できるグループとして立ち上がっています。特に「はたらくこと」は、出勤日や時間が決まっている仕事に就くことが難しい病気・難病などの患者会、法定雇用率に含まれることになつた精神障害や発達障害の当事者会にとつて、大きな関心テーマです。

また、明確なタイトルやテーマは

つかないけど、なんとなく生きづらさを感じる「グレーゾーン」のグループ（発達障害の「診断」がつかない・受けていない人たちを「グレーゾーン」としているグループもあります）、親や恋人・パートナーが障害をもっている人たちのグループ、同性パートナーを亡くした人たちのグリーフケアのグループ、近親者からの性暴力を受けた人たちのグループ、「子育て」の中でも対象を限定しているグループ（特別養子縁組家庭やステップファミリー、双子や三つ子などの多胎児の家庭）など、多種多様なグループが生まれています。そして、「精神疾患をもつセクシュアルマイノリティ」や「発達障害で依存症」の人たちのグループなど、いくつかのテーマを併せ持つグループも続々と誕生しています。

活動の内容も、サロンやミーティングへの参加にハードルを感じる仲間のために、あえて「テーマ」についての話をしなくてもいい、ものづくりの活動や、アートなどを通じた表現活動を取り入れるグループも増えてきて、ますます多様になっていきます。一方で、体験を語り合ったり分かち合ったりの活動はせずに、ス

活動をはじめたときの想い

- なかったから、つくった。
- どこかに自分と同じ人はきっといると思っていた。
- 参加していた会で話す内容が、自分の状況とちょっと違った。
- 体験の共有ではなく、生活上の課題をどう解決するかを考える会がほしかった。
- 「その時のこと」を話せる仲間がほしかった。
- ここでは「話題にしてもいい」という時間をつくりたかった。
- 他の人はどうやって乗り切ったのか、どう工夫しているのか知りたかった。
- 自分たちがサバイバーになれた理由を仲間と話すことで探りたかった。
- 会議室で共有するだけじゃなく、社会に伝えて、変えたいと思った。

ポーツや音楽など、趣味を通じた交流を目的としたグループも増えていきます。

さらに、参加者同士をグループ化したり、「地元で立ち上げたい人」の支援をするSHGも増えてきました。

もともとグループが少ないテーマの会には全国から参加者が集まる状況があります。地域が増やすことで当事者が無理なく参加できるようにしたり、グループが増えることで選肢を増やしたり、社会の認知を高めていきたいという目的もあります。SHGは細分化し、増えたり減ったりしているので、「どこにグループが

あるかわからない」「どんな活動があるのか、知りたい」という仲間のために、SHGをリストにして公開する団体も増えてきています。

■ セルフヘルプというカ

SHGは、市民社会を実現していく上で欠かせない重要な存在です。

当事者にとっては、悩み・不安・苦しみ・悲しみなど様々な気持ちを分かち合える共感と、体験や想いを共有できる安心の場であり、それによって自身の存在を確かめられると語る方も多くいます。「わかってく

本誌「セルフヘルプという力」コーナー バックナンバーのご紹介

毎回、いろいろなグループにお話かがっています

- ・ にじのころ (342号) 2016年
- ・ ぶどうの木 (343号) 2016年
- ・ あめあがりの会 (344号) 2016年
- ・ 患者スピーチバンク (345号) 2016年
- ・ アスペルガーアラウンド (346号) 2017年
- ・ SIAb. (347号) 2017年
- ・ Tokyo Deaf LGBT bond (348号) 2017年
- ・ 楽の会 リーラ (349号) 2017年
- ・ アトピーを良くしたい (350号) 2017年
- ・ 特別養子縁組グミの会 (351号) 2017年
- ・ 黄金ネットワーク (352号) 2018年
- ・ 視覚障がい者ネットワークコトリナ (353号) 2018年
- ・ オレンジティ (354号) 2018年
- ・ 若年発症パーキンソン病患者の「きぼうの会」 (355号) 2018年
- ・ Spring (356号) 2018年
- ・ 大空の会 (357号) 2018年
- ・ ちいたび会 (358号) 2019年
- ・ J-CODA (359号) 2019年



東京ボランティア・ 市民活動センターの相談

東京ボランティア・市民活動センターでは、NPO、ボランティアグループ、当事者団体の設立・運営などのご相談をお受けしています。ぜひ、お電話ください。

TEL: 03-3235-1171

れる人」や仲間の存在が大きな勇気となって日常を支えてくれるのです。また、具体的な経験から見出された生活の工夫や、先ゆく人の知恵も共有され、当事者同士だからこそ可能な互助・共助の力となっています。またグループの中には、自分たちの状況や課題を社会に発信していく機能を持つものもあり、その過程で、「なまえ」のなかったものに光をあてたり、「見えにくいこと」や「見逃されていること」が認知・共有されるように発信をしたり、当事者がグループの外でも「隠さずに、言え

る」社会にしていける、そういった働きかけがされています。SHGの存在が、社会のありようを問い、社会を変えていくことにつながります。最後に、セルフヘルプグループ、当事者の集まりについての声をご紹介します。

●セルフヘルプグループとは：
 ・「そっだよね」と言ってくれる人がいるところ。
 ・見えにくいものについて「わかる、わかる」と言ってくれる場所。

・いつもは隠すことに必死だけど、ここではなんでも出せる。
 ・自分たちには仲間が必要なんだとわかる場所。
 ・一人ひとりではなく、グループで悩むことの可能性を感じる。
 ・自分が自分でいられる時間。
 ・「今日、来てよかった」と言ってもらえることが励みになる。
 ・グループをやることで、自分自身の自己肯定感が高まっている。
 ・ちょっとしたことで仲間と話していくと、日々の生活が変わる。
 ・専門家が知らない、当事者だから

わかること。そういうヒントの交換や情報の積み重ねができる。
 ・社会とのいろんな接点が増える場。
 次号では、SHGを運営していく上で直面する課題や工夫などをご紹介します。
 (相談担当専門員 森玲子)

*アルコホーリクス・アノニマス(AA)から始まった「回復」のためのプログラム。最近では、多様な自助グループ等が取り入れている。



Vol
19

聖学院大学 ボランティア活動支援センター

あなたのまちの **キラッと☆**
ぼらせんナビ

ボランティア・市民活動センター、略して「ボラセン」をご存じですか？ボラセンは、あなたの住むまちにもある、あなたのボランティア活動・市民活動をサポートする窓口です。このページでは、毎号各地域のボラセンに登場していただき、メッセージとともに、その特色や利用の仕方などを伝えてまいります。



たくさんの学生が復興支援について語り合った。未来はここから始まる。



真剣な表情でワークショップは進む。自分たちの活動を紹介しつつ、課題も浮かび上がったようだ。



ボランティアサミット
「未来をひらく〜3・11から〜」のチラシ。

学生の復興支援活動を応援する大学ボラセン！

学生自ら企画・運営！

未来をひらく〜3・11から〜

聖学院大学ボランティア活動支援センター（以下センター）は、東日本大震災を大きな契機として、2012年4月に設立された（ホームページより一部引用）。今回は、センターが共催し、聖学院大学の学生が実行委員を務めるイベントに参加し、その活動取材した。

9名の実行委員を中心に

このイベントは、宮城県石巻市旧大川小学校の校歌のタイトルでもあった「未来をひらく」をテーマに9名の実行委員で企画・運営された。午前には、旧大川小学校で津波の被害にあった只野哲也さん、娘さん、この津波で亡くされた佐藤敏郎さんの講演会が開かれ、皆そのリアリティある語り口で心を奪われた。

午後のプログラムでは、ワークショップが行われ、10大学2高校の学生たちが、東日本大震災の復興について、自身の想いを語り合った。自分たちの活動を思い思いに紹介しながら、学生として今後自分たちが関わるべきことについて熱い議論が交わされたようだ。実行委員長の菅野さん（聖学院大学4年）は仙台の出身。「震災の記憶を風化させないことが大事だと思います」と語る。同じく実行委員の玉之内さん（聖学院大学1年）は「今（被災地に）何が必要とされているか考える力が必要」と力強く答えてくれた。

ワークショップ後の交流会では、お互いの活動を称え、つながりの輪が広がっていく。参加した学生たちは、ここからどんな「未来をひらく」のか。

センターは、災害支援の他にも「夏の"ちよつと"ボランティア」や「ボラTea」ボランティア団体紹介&情報交換会」などを通してボランティア活動はじめての一步を応援する企画を実施している。

聖学院大学 ボランティア活動支援センター

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1
1号館1階1103教室 / 1号館地下1階1 cafe 相談窓口
電話：048-780-1705

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1
1号館1階1103教室 / 1号館地下1階1 cafe 相談窓口
電話：048-780-1705



アランのことは寺山修司の本ではじめて知った。気が滅入ったところで雨ふりが変わるものではない。わるい天気のように上機嫌な顔で生きよ、と説くアランに対して、それは精神の売春というべきものだなとひどいことを書いていた寺山（さかさま世界史「怪物伝」）。

時がたち、学校で「好きなことば」がテーマのエッセイの課題を出された子供（高校一年）から、なにか良い本はないかと聞かれた。私は、読書の習慣がない子供にも読み

ボランティアパッション？

やすそうな本として、アラン『幸福論』を読む、という副題がついた『人生にはしあわせの甘さがある』（神谷幹夫）を貸してやった。いつになく真剣なまなざしでページをめくっていた彼女が、どの章を選んでどのように書いたかは知らされなかったが、ものの一時間で書き上げ、学校に持って行った。

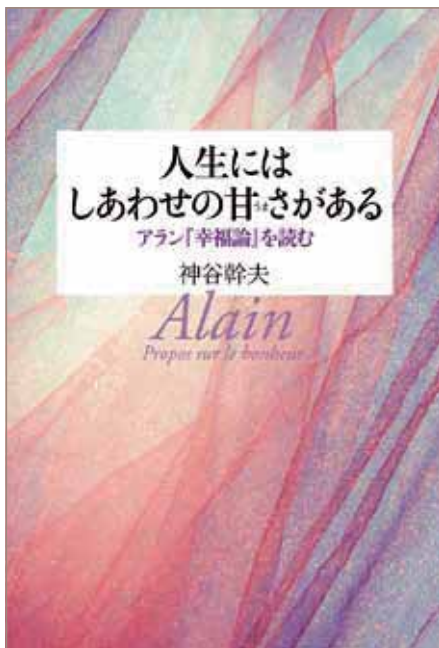
事のついでに私もべらべら拾い読みしていろいろ面白かった。こんな言葉がある。

《過去を見つめることから生まれるあの悲しみは何の役にも立たない。それどころか、きわめて有害なものだ。なぜなら、それは無益な反省を求め、無益な探求を強いるからである。スピノザは、後悔することはあやまちをくりかえすことだと云っている。》

あやまちをおかす。一回目。それを悔いとともに思い出す。二回目。なるほど。味なことをいうスピノザ。これはスピノザのどの本に書かれているのだろうか。

別の本でアランは、精神は行動に酷似する、と云っている。行動するより思いわずらうことの多い私には、これはおそろしい言葉だ。だって、酷似したものを知らずにいつも人目にさらして生きてきたのだ。そしてこれからも。

ところで、行動・能動を意味するアクションに対して、パッション（感情・受動）というが、では、ボランティアアクションがあるなら、ボランティアパッションもあるだろうか。これはアランのものではないが、「善いおこないは誰にでもできるが、善い心はかぎられた人しか持つことができる。」という気になる言葉とすれちがったことがある。（細井弘）



上)『さかさま世界史 怪物伝』
寺山修司／角川文庫

下)『人生にはしあわせの甘さがある』
—アラン「幸福論」を読む
神谷幹夫／佼成出版社

セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

「聞こえない親をもつ聞こえる子ども(コーダ)の存在を知ってほしい」

第18回

J-CODA

(Japan Children of Deaf Adults)

聴覚障害者を親に持つ聞こえる子ども(以下、コーダ)が、成長する中でどのような困難や悩みを抱えているのか、その実態は当事者ではない人には分かりにくい現状があります。コーダの当事者として活動を続けている村下佳秀さんと中津真美さんにお話をうかがいました。

はじまりの物語

「コーダのグループが誕生」

元々コーダという言葉はアメリカから入ってきたのですが、1994年に世界ろう者会議が開催された際に、聴覚障害当事者の子ども(成人)も一緒に集まったことが、コーダという言葉や捉え方が始まったきっかけと言われています。日本でもその後コーダの集まりができ、当事者たちによる活動が始まりましたが、コアメンバーへの負担などの理由から一時期活動を休止し、2000年後半ごろに再開されました。

活動の初期にはまだコーダを表す手話もなかったぐらいでしたが、その後少しずつ市民権を得て来しました。

最近では新聞に取り上げられることも増えてきました。とてもうれしく思っています。

「親の代わりに子どもの負担に」

コーダは、親が全く聞こえないろう者なのか、多少は聞こえる難聴者なのか、

両親ともそうなのか、親の一方がそうなのか、手話を使うのか等で細かい違いはありますが、聞こえない親と聞こえる社会の間で様々な軋轢を経験せざるを得ない場合が少なくありません。

まず家庭での生活ですが、聞こえる親子の家庭とはあらゆる点で様相が異なります。一例ですが、親は声で子どもを呼びますが、子どもは親が自分を見ていなければ、声で呼んでも伝わりません。距離が離れている時に子が何か物を投げて呼ぶなんていう場合もあります。当然そういうことをすると怒られますが(笑)。

親に代わって電話をかけたたり、受けたりすることも頻繁にあります。ある人の例ですが、小学生の頃、駐車場の契約更新について親にかかってきた電話にでなければなりませんでした。限られた語彙しかない小さな子どもが「ちゅうしゃじょう」を手話で通訳して親に伝えたら、どうなったと思いますか。子どもは先方の話を音で聞いているので「駐車」が「注射」となり、「注射する場所」になってしまいました。親は「注射」するところは病院なので、医者のお話かと思ってしまっ。その上で「けーやく」とか「こーしん」とか言われても、もはや話は通じません。結局契約は更新されず車を停めることはできなくなり、その子は親に叱られました。

このようなことはコーダにとっては珍しくない経験ですが、積み重なると、子どもは電話に出るのがすっかり嫌になってしまうようになりました。電話の度に嫌

な思いをしたくありませんから。

親と一緒にTVを見ていると、ドラマやコントなど、音声でしかわからない場面を子どもが説明させられることもよくあります。子どもはちっとも面白くなくなってしまう。

家庭の外でも、長年学校や役所、病院など、様々な場面で子どもにとっては難しい内容を手話通訳しなくてはならず、中には手話を極端に嫌いになってしまうコーダもいます。

こうしたことはほんの一例ですが、コーダは、小さい頃から自分の家庭は他の子の家とは違うのだと強く意識せざるを得ないので。コーダの家庭は親子関係が悪化する負のスパイラルが起きやすいかもしれません。

誰にも言えない悩みを抱えて

親が聞こえない場合、子どもはいわゆる「ろう文化」というものに触れながら日々生活しています。例えば、手話で相手や自分を指さすことはごく普通のことですが、聞こえる人同士のマナーでは非常に失礼にあたる場合があります。親子のコミュニケーションでそれに慣れている子どもが、聞こえる人によってしまつと怒られてしまうこともあります。親が文章を書くのが難しい場合もあります。聞こえない人はしゃべる言葉を「日本語」と呼ぶことが多いのですが、手話から「日本語」に変換して書くと、手話



イベントチラシ



勉強会チラシ

J-CODA (Japan Children of Deaf Adults)

キーワード

コーダ、聴覚障害の親をもつ健聴の子ども

Facebook: <https://www.facebook.com/japancoda/>

聴覚障害の親を持つ聞こえる子ども（コーダ）による当事者の会。同じ経験をしてきたコーダ同士が体験や想いを語り合う場づくりや、様々なテーマで勉強会やセミナーを行っている。

メンバー 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども

活動内容 情報交換、勉強会、セミナー、屋外イベント 等

活動エリア 東京他全国

相談 あり

集まれる場 あり

連絡先 j-coda_2011@yahoo.co.jp

には助詞がなく、動詞や目的語の位置が異なる場合もあり、人によっては文章がおかしくなってしまうこともあります。学校に通っているときは、学校の連絡帳を子どもが自分で書くか、親から書いたものを添削してくれと頼まれます。文章のことで親への侮蔑の言葉を耳にすることをすらあります。わけが分からず「うちの親はどうして書けないのだろう」と独り子どもが悩むことも珍しくありません。他にもコーダの生活に特有のいわゆるあるある、がいくつもあります。周囲の人からかけられる言葉もそうです。「通訳してあげて。親は聞こえないんだから」「あなたがしっかりしなさい」「えらいね、頑張ってるね」「かわいそうね。苦労してるんでしょ」などなど。こうした言葉には、障害者への世間の偏った認識が如実に出ていると感じます。

子どもはこのような経験から「障害者の子どもだからしっかりしなきゃ」「嫌われないようにしなきゃ」と絶えず意識することも大事だと思います。親にも、教師にも、誰にも相談できません。親について、自分の存在について、悩み続けているコーダがいることを知ってほしいと思います。特に学校関係者、保健所の関係者、子育て支援や障害福祉に関わる人などには知ってほしいと思います。子どもは親のケアラーではありません。子どものためにも、親が障害福祉サービスや子育て支援のサービスをより利用しやすくするよう理解が広がるのがとても大事だと思います。

私たちに繋がってください

私たちの活動は、コーダによるコーダのための活動です。同じ経験をしてきた仲間同士が、ざっくばらんに話し合える場です。普通の手話クラスでは「親が聞こえないのに、手話できないの？」などと言われてしまうこともあります。ここでは安心して手話を学べます。様々なテーマで勉強会やセミナーも行っています。

私たちの活動を通して、より多くの人にコーダの存在とその心理を知ってほしいです。全国のコーダが「自分は一人ではない」「いざとなったらここに相談しよ

う」と思える場所になりたいと願っています。「自分はコーダなのだ」というアイデンティティを持ち、コーダが経験したことは、辛いことでも楽しいことでも、ひとこと言えばすぐに通じるし、多様なコーダを受け入れることができるという強みを感じる事ができれば、生きづらくてもなんとか生きていけるものです。当事者の支えを必要とする若いコーダがみなさんの周りにも必ずいるはず。その子たちに私たちの存在を伝えて下さい。私たちに繋がってください。その子話を聞いて受けとめますから。

佐藤新哉（編集部）

読者の声 ~本誌358号より~

読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

◆特集：地域にひろく空き家と住まい

・空き家を地域の活性化（知ってもらった）の場として活用する発想はすごい。また、個人の自宅に人を呼び、地域交流の場としての活用法もすごい。

・本来誰も居ない、よりつき難い空間を「人が集まる空間」としてデザインし直すのは、これからの未来を感じるお話に聞かれました。子どもたちにある「公園がない、たむろする場所がない」問題が、空き家によって解消、改善される可能性は十二分にあるのではないかと思えました。また、イベントや教室、新しい試みも空間が提供される事によって解決するなり、空き家の提供一つで可能になるなら、多くの自治体で取り組んでもらいたいなと考えました。

◆思い立ったがボラロ！

冬のぼんぼり祭撮影ボランティア

・「冬だからこそ」できるお店や取り組み、屋内で出来る事も数多くあり、そこで作れる空気感、盛り上がりはまったく別のモノができていくのだからと想像しました。

◆セルフヘルプという力：若年認知症

交流会 小さな旅人たちの会

・若年認知症になってしまったことが幸福とはいえないが、これがきっかけで新たな出会いの場があり、関係している人たちが報われる場となっているのだからと感じた。

◆いいものみいっつけた！

目黒区立大橋えのき園

・ガラス製品はアナログの真骨頂。その人の想いが秘められる、まさにアート作品であると思った。

◆特別企画：2018年ボランティア・NPO・市民活動をめぐる動き

・北朝鮮問題、東京五輪の話題でにぎわう中、高校生ボランティアアワードや子ども権利条約全国フォーラムなど、10代をターゲットにした動きが盛んであることに、高校生の僕たちもやる気がでる。

◆その他

・355号より全ページカラーとなり、とても読みやすくなったという感想をいただきました。

東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<http://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

利用

| | |
|------|--|
| 会議室 | 会議室A・B (各40人)・C (15人) 無料 ※会議室AB通し (80人) |
| 貸出機材 | 印刷機 (2台) 紙持ち込み、点字プリンター 他 申込み 4ヶ月前から電話で受付 (03-3235-1171) |

情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。 <http://www.tvac.or.jp/>

開所時間

火曜日～土曜日：9時～21時 / 日曜日：9時～17時
(月・祝祭日・年末年始除く)

交通アクセス

JR、地下鉄 (東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 出口B2b)
飯田橋駅下車

ネットワーク は、
ボランティア・市民活動を広げ、
応援する情報誌です！

【次回予告】2019年5月下旬発行予定

特集 伝承する市民

(仮題)

発行人 山崎美貴子

編集委員 五十嵐美奈 (興望館)
上杉貴雅 (オレンジフラッグ)
齋藤啓子 (武蔵野美術大学 造形学部教授)
シュレ大学 社会学ゼミ (NPO法人東京シュレ大学)
服部篤子 (社会起業家研究ネットワーク)
平野 泉 (立教大学共生社会研究センター)
まつばらけい (フリーライター)
渡戸一郎 (明星大学名誉教授)

編集・発行：東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
セントラルプラザ10階
TEL: 03-3235-1171 FAX: 03-3235-0050
E-mail: nw@tvac.or.jp

印刷：(株)美巧社

デザイン：東京ボランティア・市民活動センター / (株)美巧社
表紙イラスト：フローラル信子

2019年3月20日発行 (通巻No.359)
ISBN 978-4-909393-10-4 C2036
400円 (消費税込)

本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。



いいものみい〜つけた!

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol.
18

特定非営利活動法人 SOU



1

SOUは障がい者の方々が福祉作業所で手づくりした雑貨等の商品を展示、販売しております。社会での彼らの活動を一人でも多くの方に知ってもらい、少しでも関心を持って頂きたいという思いから、設立しました。商品は東京都を中心に宮城県や広島県、海外からはイタリアの作業所の自主製品の中から、クスツと笑えるカワイイ商品や機能性が高くカッコイイ商品等、他にはない一点ものの商品をセレクトし、オンラインショップ、イベント、知人の方々の実店舗で販売しております。上記以外の活動では、レーザークラフトや作業所で製作した陶器を用いたワークショップ、障がい者の方対象のパソコン講座も定期的を開催しています。今後もイベント出店やワークショップを開催して参ります。是非、遊びにいらして下さい。

特定非営利活動法人 SOU

所在地 東京都立川市錦町1-4-4 サニービル2F CS-17

TEL 042-507-8025 **FAX** 042-507-8025

E-mail npo.sou@gmail.com

HP <http://uso-sou.com/> (オンラインショップ)

Facebook <https://www.facebook.com/shopdesou/>

Instagram <https://www.instagram.com/sou.npo/>

Blog <https://ameblo.jp/sou-npo/>



2



4



3

1 廃材である米袋に柿渋を塗布したトートバッグと機能的なベンケース。 **2** おばけをモチーフにした、ユニークな一点ものの陶器の箸置き。 **3** ワークショップの様子。陶器を用いてネームプレート等を作ります。 **4** イベント出店の様子。立川市近郊や日本橋、霞が関等で出店しています。

社会福祉法人清水基金

社会福祉法人・NPO法人への建物・設備等の整備を支援する助成事業や、職員の皆さんの研修事業を通じて、障害福祉サービスの一層の向上を目指しています。

2019年度 助成事業・研修事業を募集しています。

社会福祉法人助成事業

対象

障害者福祉の増進を目的として運営されている社会福祉法人で、2019年4月時点で開設後1年経過した事業所

申込期間

6月1日～7月31日（必着）

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
※総費用に対し、30%以上は申込法人負担
- ・助成金額 1法人1件、50万～1000万円
- ・決定時期 2020年1月末

NPO法人助成事業

対象

障害者福祉の増進を目的として運営されているNPO法人で、2019年4月時点でNPO法人になって3年経過し、申込時点で有効な「障害福祉サービス事業者の指定（更新）通知書」を持つ事業所

申込期間

5月1日～6月30日（必着）

内容

- ・助成物件 利用者に必要な機器・車輛・建物等
※総費用に対し、20%以上は申込法人負担
- ・助成金額 1法人1件、50万～700万円
- ・決定時期 2020年1月末

海外研修事業

対象

社会福祉法人・NPO法人に所属し、障害福祉サービスに従事しており、海外の障害福祉等から学ぶ課題を持ち、意欲的に挑戦する方

申込期間

6月1日～7月31日（必着）

内容

- ・募集人数・助成金額（予定）
 - ①3ヵ月コース 2名200万円/名
 - ②1ヵ月コース 6名100万円/名
- ・決定時期 2019年10月
- ・研修期間 2019年4月～7月

国内研修事業

対象

社会福祉法人・NPO法人に所属し、障害福祉サービスに従事している方

申込期間

4月1日～5月9日（必着）

内容

- ・定員 24名
- ・研修内容 2泊3日の宿泊型（施設見学、講義、演習）
- ・費用 受講料・交通費等、研修にかかる費用は基本的に清水基金負担
- ・研修期間 2019年6月27日～29日

※詳細は清水基金ホームページをご参照ください。⇒<https://www.shimizu-kikin.or.jp/>

ISBN978-4-909393-10-4 C2036 ¥371E